

## 長崎由来の古典落語 (らくだ)

西村 仁

戦前の長崎の町では芝居(歌舞伎)がとても人気があったことで、よく知られています。多くの芝居小屋が建てられ、連日のように公演され、小さな子どもでさえも有名な場面の台詞などを良くそらんじていたと言われています。それに対して落語の方は言えば、大阪や江戸からも遠く言葉も違うので、ともすれば無縁であったかのように思われていますが、長崎由来のものや長崎に渡来した文物が元となって創られた演目も多くあります。その中には、「長崎おこわ」「テレスコ」「ちりとてちん」「らくだ」などがありますが、今回はその中から、とてもユニークで最も代表的な名作「らくだ」を取り上げて、長崎とのゆかりを探ってみたいと思います。

◇◇ 「らくだ」のあらすじ ◇◇

町内の暴れん坊で「らくだの卯之助」とあだ名を持つ男が、突然フグの毒に当たって長屋の自宅で死んでしまいます。そこに兄貴分の熊五郎が訪ねて来て死体を発見します。そこで何とか葬式を出してあげたいと思うも、金がありません。するとそこへ屑(くず)屋が通りかかります。一計を案じた熊五郎は屑屋を呼び止め、強制的に手下として働かせ、長屋の住人からは香典を集めさせ、大家からは葬式の酒と肴を出させようとしますが、大家は頑として断ります。怒った熊五郎は大家の家に乗り込み、屑屋に死人(しびと)を背負わせ「かんかんのう」を踊らせます。恐怖で逃げまどう大家とその妻が、ついに酒と肴を約束します。同様の手口で棺桶なども手に



ラクダ図 (長崎歴史文化博物館蔵)

入れ、届いた酒を早速に飲み始めた二人でしたが酒が入るにつれて、次第に二人の上下関係が変わっていきます。手下であったはずの屑屋が徐々に熊五郎と立場が逆転し、挙句の果てには熊五郎に命令するようになります。泥酔した屑屋は早く死体を火葬しようと思い、棺桶に入れて火葬場(火屋)へと運び込みます。しかし着いてみると、なぜか死体がありません。さては途中で落としかと道を戻ると、酒に酔って道に寝ている坊主がいます。それをあわてて「らくだ」男と勘違いして棺桶に入れ、火葬場へと運び込みます。そして火葬場の火を点けると坊主が目を覚めました。

◇◇◇◇

酒好きには、たまらない噺です。笑福亭鶴瓶の師匠、六代目松鶴が得意としていた演目で、屑屋の酪酊ぶりが見せ場のひとつとなっていました。

○この噺の元になった動物のラクダは、どこからやって来たのでしょうか。それは文政四年(一八二二)に出島のオランダ商館長(ブロンホフ)が、將軍に献上するために輸入したものでした。

○別段献上品は次の品々です

皇帝陛下宛にて 駱駝 二頭

(中略)

出島 一八二二年七月三十日

とあり、出島の史実としてよく知られています。しかし結局は幕府より

### 風信

○二月三日は旧暦によると冬と春の気節をわける「節分の日」である。旧悪や旧災を拂うため豆をまき火をたいて悪魔を拂い、良き新年を迎えるのであるが、旧暦を見ると今年の「節分の日」は十二月十八日であり旧暦の一月一日は二月十六日とある。すると其の間はまだ十二月という事になる。さて、其の二月四日より十六日までの間は「新春」と言っても良いのだろうか……このような気節と暦の事は昔からあつたようである。平安時代の和歌集にも次のような和歌がある。

年のうちに春は来にけりこの年を 去年とや言はん今年とや言はん

○一月十五日(月)恒例により本協会の新春初会合を午前十一時より開催。小川会長はじめ五十数人の参加があり、新行事計画を中心に午後三時すぎまで熱心な討論があつた。

○一月二十八日(日)午後一時半より、「世界の平和を願う長崎県九条の会」本年度初役員会を井田事務局長を中心に開催。盛会であつた。

○本年は長崎日本ポルトガル協会創立五十周年を迎える。其の記念会を兼ね通常総会と遠藤周作文学館川崎友理子学芸員の講演会を二月二十日(火)午後二時半より長崎グラバービルで開催するので、御出席下さいとの連絡あり。

○今月、御寄贈いただいた書籍

一、平幸治氏より「史料翻刻・佐賀藩深堀日記」。六二〇ページの大部であり同氏の「あとがき」によると「平成二年ごろより」この資料翻刻編輯に取りかかれたそうである。巻頭に記事内容の説明があり大いに参考になった。(発行・長崎文献社・四千円十税)

一、赤瀬浩氏より自著の「河津祐邦」。河津氏は長崎最後の奉行であり幕末の長崎を中心とした幕末の事情がよく研究された立派な研究論考だつた。(発行・長崎文献社・一六〇〇円十税)

一、土肥原弘久氏より自著の「長崎くんち―取材記録」。長崎くんち奉納作法や明治三十六年より大正十四年までのくんち記録を中心に参考となる良い資料だつた。

一、糸屋悦子氏よりらく「楽」38号―長崎く東南アジア海の道。長崎を基点にバンコック・アユタヤに出かけた御朱印船物語を中心立派に編輯されていた。(イーブズワークス社編・一〇〇〇円十税)



かんかんのう 長崎古今集覧名勝図絵より

この落語は、(和)の芸能である落語と、(華)の音曲「かんかんのう」と、(蘭)のオランダ渡来の「ラクダ」とがミックスされて、頓知の効いた噺として創りあげられた古典落語の傑作です。まさに和華蘭(わからん)文化の融合によって出来たものであり、長崎由来の古典落語といえるでしょう。

落語を媒介として歴史を学ぶことは、とても楽しいことです。海を渡り、出島の水門をくぐってやって来た「ラクダ」を想像しながら、是非一度、落語をお楽しみください。お後がよろしいよう。

(長崎歴史文化協会会員)

長崎歴史文化協会研究室

TEL 八二二一―一五四〇  
十八銀行公会堂前出張所2F

